

福田恆存における批判精神と自我の構造

—近代化の問題めぐって— (4)

村永 次郎

日本大学大学院総合社会情報研究科

The Frame of Critical Mind and Self in Fukuda Tsuneari (4)

—In Reference to the Problem of Modernization of Japan—

MURANAGA Jiro

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

At the last stage of his inquiry about the problem of modernization of Japan, Fukuda Tsuneari returned to the question of dramatic production. This was what his activities as literary critic, dramatist and commentator of modern Japan necessarily brought him to. Having surveyed the whole course of his literary pursuit of wisdom and his concern with the fate of “modern” ego both in the West and Japan, it is to be easily understood that it was his inquisitive mind, his deep interest in what humans will be, and his love of mankind that enabled him to engage in those intellectual struggles which we have seen, and to produce noble ideas and notions of unsurpassed quality.

6 演劇活動による近代化問題への取組

6. 1 演劇活動への必然的移行

福田はロレンスに人間観の重要性に気づかされて以来、「自我」と如何に付き合うのか、この難問が常に頭を支配していた。近代化問題についても同様であった。

福田の区分する第1期は、文壇を対象にした対立の精神による評論活動、批判精神に基づく作家論中心の文筆活動であった。しかし、福田が抵抗を感じていた時代の風潮そのものが自己倒壊し、福田自身の活動も転換を余儀なくされ、必然的に福田自身が対象となった。これが「自我」との対立を見据えた第2期であり、重点が「戯曲」に移行した。

この間に、「演戯」の思想、「自我」の始末法、近代化問題の本質・背景について目途をつけた。その表れの代表が次の第3期に書かれた『人間・この劇的なるもの』である。

この頃から対象を広く世間に求め、本当に書きたいこと、やりたいことをするようになる。福田の人間観を中心に、社会の具体的な現象の背後に本質の問題が潜んでいること、どのように現象から本質に迫るかを明らかにしようとしたのである。

福田の凄さは行動を伴うことと既に述べた。自ら実践、行動という狙いでシェイクスピア劇の全集翻訳及び劇団創立・演劇活動と展開していき、近代化問題、「自我」の正体の追及など現象から本質の問題に深く迫っていった。

「行動」が伴うと言うことは、「経験」が深まり、机上ではない生きた知識の体系化、思想の深化を促す。ロレンスに気づかされた人間の発見以来、キリスト教における絶対神の探求、シェイクスピアの研究、演劇と人間観の普遍的様相を深めた。この深まりは福田の主観を越えて真の客観性、無私の精神に至ったと言えるのではないだろうか。

哲学者でありフランス文学者の森有正（以下、「森」）は次のように言っている。

客観に徹すれば徹するほど主観性が確実に
 かって来るということであった。さらに言い換
 えると、主観が深められ、自由になって来る。す
 なわち新しい発見が起って来る、ということ
 である。

(「森有正全集 1 2」『経験と思想』p.61)

福田の妥協を許さない探求は、森の指摘の如く、
 新たな発見を促し人間観、思想に真の客観性を与
 えたと考えられる。最終的に、これを眼に見える形
 として広く世間に提供したのが「演劇」であつた。

思い起こせば、福田が19歳の時、戯曲に興味を
 持ち始め、築地座の脚本募集に入選したことがあ
 る。福田が対象を知識人から世間に変え、最終的に演
 劇活動をするようになったのも宿命であろう。

なお、真の客観性を獲得する可能性は、後述する
 「自我の構造」の中で更に明らかにされる。

6. 2 演劇の特性

明治以来、日本が宿命的に抱える近代化問題の解
 決にあたり、何故演劇であつたのか明らかにされな
 ければならない。

好きだからと言ってはいるが、取り組み姿勢には
 並々ならぬものがあつた。確かに主観の分野である
 が、主観の外に決定的な、単なる趣味の問題に収め
 てはならないものがある。福田は、日本の近代化問
 題において新劇がその象徴であり、「歪み」を一手に
 引き受けていると、次のように述べている。

私の中には健康、秩序、有機性、全一性とい
 ったものに對する憧があつて、一方、現代日本
 の文學、藝術、文化すべてにおいてその憧が満
 されず、その慾求不満がいつの間にか私を演劇
 に迫込んだのではないかと思ふのです。今擧げた
 健康、秩序、有機性、全一性は演劇において最
 も維持されてをり、また最も恢復され易いもの
 であると同時に、日本の新劇においては最も歪
 められ、最も恢復し難い状態に陥つてをります。

(「全集 5」『演劇的文化論』p.403)

ただ演劇の近代化により全ての近代化問題が解決
 するとは考えていない。日本の近代化は似非近代性
 であつて、演劇において真に誤魔化し様のない形
 ではっきりと現れる、と福田は指摘している。ⁱ 近代
 化の遅れが小説を代表とする文学では目立たず、新
 劇ではどうして目立つのか、最も顕著に現れるのは
 何故か。それは、演劇の特性などに由来する。

演劇は、日本人の肉体、肉声により日本人の視覚、
 聴覚、感性に訴える芸術である。詩や小説と同じく
 西洋の翻訳からスタートして、声を棄てた文学では
 誤魔化しが効くこともできたが、演劇ではそうはい
 かない。実際の人間が演ずるからである。

また、翻訳に悪訳、誤訳が多く演劇性のみを追求
 し問題の拡大に拍車をかけた。福田は、自己国籍を
 殺した普遍的なものに日本人の声を込めることが、
 近代化の最終目標と言っている。ⁱⁱ

次の特性として、西洋の近代以前の文学と演劇の
 歴史の違いである。それは、演劇の方が伝統ある古
 い芸術で保守的性格を持っていることだ。現代的な
 演劇性を持たせようとする抵抗する性向を有する。
 演劇は、伝統とは勿論、人生・文化そのものとも深
 く結びついている芸術なのである。

新劇は、そこに気付かず表面的な演劇性の近代化、
 現代化のみを追及した結果、自国に定着せず自国の
 作家も生むことができなかつた。演劇の本質を見な
 かつたためだ。そのため、問題劇的政治的有用性の
 味付けで誤魔化し、自己満足する活動にしかならな
 かつた。

3つ目に演劇の集団芸術性がある。この特性から
 幾つかの問題が生じる。それは、1人で学んで実行
 に移すのが難しく二人三脚が必要であること、その
 ため、成功失敗の責任の所在が不明確となり馴れ合
 いに陥り易いこと、演劇は1回限りであり、作品を
 自分の目で客観視し得ないことなどがある。これは、
 人生そのものに似ていると福田が着目した点である。

更に、日本の大衆社会化現象、つまりラジオ、テ
 レビ、映画の発展が新劇に悪影響を与えたことであ
 る。新劇人はそちらで収入や人気を保証されており、
 演劇の真の発展に逆行したのである。西洋の場合は、
 演劇が十分発達した後映画などが登場したため、
 大きな影響はなかつた。これ以外にも、彼等が、娯

楽と芸術の近代的概念が両立するかどうかを理解していたか、福田は問題視している。

これらの問題が演劇の近代化を遅らせている、と福田は認識する一方、その眼は、演劇を通して日本及び日本人の近代化を視野に入れている。

演劇の近代化は、日本及び日本人の近代化の縮図であった。そう看破したところに福田の鋭さがある。では、演劇を通しての日本及び日本人の近代化とは一体どう繋がるのであろうか。

6. 3 演劇における近代化の意義

日本の近代化問題は一体何であったか、ここで改めて整理してみる。1つは近代化ではなく西洋化であったこと、それも各分野別にバラバラであった。2つ目には物質文明の近代化であって精神面の近代化がなされなかったこと、3つ目に言葉の問題である。この背後には、日本の宿命、民族性があった。

結論から言えば、福田はこの近代化問題を言葉、すなわち「せりふ」を中心として解決しようとした。その前に、元々劇とは如何なるものか、承知して置かねばならない。

演劇は、作者の仕組んだ筋書き（戯曲、台本）に基づき、俳優がせりふ、動作によって思想、感情を表現し観客に伝えるものである。それを、舞台装置・照明・音楽などにより支える。従って、この集団の中心になるのは俳優である。俳優のせりふ、動作は、肉声、肉体である。

福田は、肉声＝「せりふ」が、肉体＝動作を左右すると見極めている。一体化されたせりふと動作ⁱⁱⁱがあって初めて、観客と一体感を作り出しカタルシスを起こすことができる。

演劇の特性で指摘したように、西洋の演劇の導入においては「形式」の模倣となり、「内容」としては問題劇的政治的有用性で味付けするなど演劇性のみを追求した。西洋の精神も看過し、翻訳の悪さから日本人の体格、感性などに適応した劇とすることができなかった。

集団性も、結果的には作者、俳優などそれぞれが自分の技術を追求する意匠の芸術に陥り、分裂を余儀なくされた。一番迷惑を被ったのは、実は「せり

ふ」であり、観客であった。演劇の意義が分かっているため生じた問題点であった。

芸術の一分野、音楽を例にすると分かりやすい。作曲家の頭に描かれたリズムは譜面に表しても直ぐに特別な価値はない。演奏され「音」となることにより聴衆に感動を与えることができる。

演劇においても同じことが言える。シナリオに基づき俳優等が演じることにより観客はカタルシスを起こす。「音」にあたるのが「せりふ」である。

そこで福田は、中心となる「せりふ」の改革により作者、俳優等演劇の全体性を復元し、西洋の物真似から日本の演劇に変革すると同時に、日本及び日本人の近代化を成し遂げようとした。西洋化からの脱出と全体性の回復である。

「せりふ」の改革の具体策とは、せりふをフレーズ、句の粒立て^{iv}により精神の政治学、すなわち言葉を概念に捉われない、距離感を持った行動にするとともに、断定的な言い方により責任の所在の明確化、更には個人主義の確立を視野に入れたものである。

ここに演劇の近代化が日本及び日本人の近代化の縮図としての意義を生み出し、合わせて日本人の肉声・肉体に相応しいものとするができる。これが、福田の言う日本人の声を込めることである。

こうして演劇の近代化のための「形式」は整った。次に「内容」である。モデルとしたのは演劇先進国のイギリス、フランスである。新劇が後進国であるドイツ、ロシアなどの演劇を採用したのと違い、演劇の歴史、古典の意義を十分に認識していた。特にシェイクスピアを高く評価していた。

創作劇、現代劇よりも古典に意義を見出したのは、人間観に基づくもので、時代を経ても人間の本質は変わらず、当時の方が人間観が適切に表現されていると見ているからである。そして劇の本質を次のように述べる。

すでに起こった典型的な行為をまねようとする、そこに劇の本質があるからだ。劇の作者は主人公をまねようとする。実生活においてではなく、創作行為において、作者は主人公をまねる。そして役者や見物は、劇場において作

者の描いた主人公をなぞり、まねる。
 (「全集3」『人間・この劇的なもの』p.547)

更に、何故シェイクスピアなのかについてもこう述べる。

シェイクスピアは私たちになにかを与へようとしているのではなく、ひとつの世界に私たちを招き入れようとしているのである。それが、劇といふものなのだ。それが、人間の生きかたといふものなのだ。
 (「全集3」『人間・この劇的なもの』p.575)

この「人間の生き方」を劇的に構成しているのがシェイクスピアであり、特に、人間の宿命、人間・社会の不条理などを鋭く描き出していた。これが、「すでに起った典型的な行為」の意味であろう。

福田がシェイクスピアの全訳を試みた理由もここにある。

こういった「形式」・「内容」を備えた劇を観客に提供することにより人生の生き方と同時に全体性や言葉の重要性などの近代化問題を感覚的に刺激し、カタルシスを起こすとともに芸術から追放されている娯楽^vもユーモアで回復しようとしたのである。

7 自我の構造

7. 1 西洋の自我と日本の自我

ロレンスによると集団的自我と個人的自我を併せ持つのが西洋人の自我の特徴である。現実社会の中での集団的自我と神に仕える純粋な個人的自我である。福田の解釈はすでに述べたとおり、これが二元論を構成し、2つの自我を巧みに操る西洋のしたたかさとなっている。

それに対して、日本人の自我の特徴は如何なるものであろうか。森は日本人の上下的人間関係を「二項方式」^{vi}と呼び、次のように述べている。

二人の人間が内密な関係を経験において構成し、その関係そのものが二人の人間の一人一人

を基礎づけるという結合の仕方である。
 (「森有正全集12」『経験と思想』p.66)

簡単に言えば、日本における共同体のあり方で、常に相手を意識している人間関係であり、文化である。これが「和」の精神を生み、集団的行動を容易にする。一方、私的関係を意味し、排他的人間関係となり社会的道徳の欠如、個人主義の確立など困難にする。森は痛ましい日本人の欠点と考えている。

福田においては「日本人は場に囚われる」と指摘し、精神の近代化の最終目標は、日本人の「個人主義の確立」を挙げている。森と本質的に同じ指摘であり問題点と捉えている。

別の視点から捉えると、日本人の自我の弱点は相対性の中に埋没してしまうことである。批判精神を内在的に持つ西洋人に対し、日本人は、批判精神が希薄で主体性がなく個人主義の確立が難しい。両者とも、これも同じように指摘している。

当然、福田も日本人であり日本人特有の自我を有している。福田はロレンスに気付かされ西洋、キリスト教を理解するにつれ自我の対処を如何にすべきか大きな難問に突き当たる。

人間観として、そもそもエゴの問題意識があり、更に日本的自我の問題である。この難問に対する福田の信念は、一端、自我を解体しなければならぬということであった。

第1期における作家論は自我の解体への手助けであるとしたが知識人に人間観がないことに気づき、第2期において、自身で自我との対立を決意していくのは、その真剣さの表れである。そして目途をつけた。

具体的には、実践するのが「演戯」であり、最終的な出来上がりが「精神の政治学」である。近代化問題解決の鍵であり、個人の「自我」の対処法でもあるのだ。それでは「精神の政治学」とは如何なるものか見てみよう。

7. 2 自我に欠かせない精神の政治学

すでに述べたが、西洋における宗教改革、ルネサンスは2つの歴史的事実であっても、中世という時

代精神の持つ強靱な統一性と一貫性によった1つの運動だと、福田は捉えた。この精神には神に従属する自己と支配・被支配の自己があり、この2つを適切に統制、調整するのが、福田の言う、「精神の政治学」である。

この「精神の政治学」は、中世の偉業として福田は捉えている。イエスの無責任であって偉大な放言の尻拭いとして中世のキリスト教神学が生まれたと、次のように述べる。

中世の神學はこのイエスの不本意のうへに立ちあがった。イエスの意圖した政治學とはいつたいいかなるものであつたか。それは支配者と被支配者とをこしらへあげる現實政治では毛頭ない。他を支配したり他から支配されたりする政治ではなく、自己を完全に支配する政治である。ここにおいては、他を支配したり他から支配されたりする自己と、それとはまつたくかかはりのない、ただ神にのみ従属する自己と、このたがひに矛盾する二つの要素を自己の内部に並存せしめて、しかもなんの亂れも見せぬやうに統御してゆくことにほかならない。

(「全集2」『近代の宿命』p.440、441)

この2つの自己が、理想と現実、あるいは本音と建前を巧みに使い分け、健全な近代化、歴史の形成を促した。福田は、「精神の政治学」こそ近代国家を造り出すことを可能にしているものと評価している。

福田は、日本の近代化問題の核心をその特殊性と捉え、解決の糸口として「精神の政治学」の確立が必要だとする。具体的にどうということか、次のように述べる。

近代化の必要条件は技術や社会制度など、所謂「ハードウェア」のメカナイゼーション(機械化)、システムライゼーション(組織化)、コンフォーマライゼーション(画一化)、ラショナルライゼーション(合理化)等々の所謂近代化に対処する精神の政治學の確立、即ち所謂「ソフトウェア」の適応能力に在る。(中略)それに対応する方法は言葉や概念に囚れず、逆にこれを

利用すること、即ち言葉の用法にすべてが懸つてゐる。自分と言葉との距離が測定出来ぬ人間は近代人ではない。いや人間ではない。

(「全集7」『醒めて踊れ』p.393)

「精神の政治学」とは言葉の用法であると述べ、続けて距離感にも言及する。

言葉と話し手との間に距離を保ち、その距離を絶え間なく変化させねばならぬのと同様に、相手と共に造り上げた場と自分との間にも距離を保たねばならず、その距離を絶えず変化させ得る能力がなければいけない。さういふ能力こそ、精神の政治學としての近代化といふものである。(「全集7」『醒めて踊れ』p.398)

個人を確立、強靱化し、相手及び場面に膠着せず、言葉(観念)を自己所有化し、距離感の保持、すなわち関係の適応正常化を保つ事、それが日本人の「精神の近代化」と言っているのである。

そして、場を構成し或いは場によって自己を変化させながら、しかも一貫した人格を保ち続ける為には、場と自己とを冷静に眺め得る目を持たなければならない。或いは現実の場と自己とを超えた何処かに自己を隠し預ける場所を持たなければならないとする。

そこで「精神の近代化」の要となる「強靱な自己の確立」には何が必要か、具体的な意識のあり方として次のように述べている。

私たちの意識は、平面を横ばひする歴史的現實の日常性から、その無際限な平板さから、起きあがらうとして、たえずあがいてゐる。そのための行為が演戲である。(中略)上に脱け出た意識は、足下の現實が時々刻々に動いてゐることを実感してゐるはずだ。(中略)自分が部分としてとどまつてゐてこそ、はじめて全體が偲ばれる。私たちは全體を見ると同時に、部分としての限界を守らなければならない。あるひは、部分を部分として明確にとらへることによつて、その中に全體を実感しなければならない。さう

いふ二重性が、私たちに演戯を要求する。
 (『全集3』『人間・この劇的なもの』p.532、533)

具体的行動として「演戯」が必要であり、また、部分としての自覚、常に全体との関係の中で自分の役割を認識することが重要と捉えている。そして、最終的にこう述べる。

西歐の生きかたと私たちの間の距離を認識しろといつてゐるのです。(中略) 異質のものとしてとらへ、位置づけすること、さうすることによつて、「日本及び日本人」の獨立が可能になるでせう。それを私は日本人の個人主義の成立と見なすのです。

(『全集3』『日本および日本人』p.205)

「精神の政治学」には「演戯」が必要であり、福田の見出した具体的方法である。「演戯」の意義、「演技」との差については既に述べたとおりである。

具体的な効果としては、日本として似非近代化の是正、個人としての個人主義の確立のみならず、日本と西洋の差の見極めにも幅広く通じるものである。共通要素として距離感の保持なのである。

問題は、日本には絶対者である神が存在しないことである。福田はこの神に代わるものとして「全体」を見出している。主要思想のうち、「全体と部分」でこう述べた。

キリスト教の観念論の世界においては、個人の中に全体を含む、それが精神である。その各個人が有している精神を、万人共通の人格神として取り出したのがキリスト教だと福田は言うのである。(本論文(2) 2. 3 全体と部分)

『人間・この劇的なもの』の中で自分を部分と認識し、その中に「全体」を実感しなければならぬと述べているのはキリスト教精神と同じ捉え方である。福田は、絶対者が日本にいないことを踏まえ、神の代わりに「全体」を意識したのである。

「演戯」における“上に脱け出る意識”、“全体と部分を意識する二重性”、“自己を隠し預ける場所”

などと言っているのは、客観的に自己を見るようなことや全体の中の一部として認識することではなく、実はそういったことを担う「自我」が部分的に存在していることを指すのである。まさに西洋的な2つの自我を持つ構造である。

では、日本人としての「自我」を有する福田は、どのようにして理想とする「自我」を確立し得たのであろうか。また、その構造は如何なるものであろうか。

7. 3 自我始末法—自我の解体・確立

知識人に人間観がないことを痛感した福田は、人間観のある、なしの差をはっきりしなければならぬと考えた。そのためには自ら確認しなければならぬと、強い決意でこう述べている。

いひかへれば、私は自分の手で自分を追ひこみたかつたのである。どこへでもない、「人間」のなかへ、「自分自身」のなかへ。

(『評論集2』後書 p.318)

西洋と日本の自我の差、日本の自我に関する弱点を認識している福田は理想とする自我を追究する。これは、日本的自我を有する自身の自我を解体し、理想の自我を確立しようとする決意である。福田は自我始末法と言っている。

第1期から第2期にかけての福田の活動の狙いとして既に述べたところである。ではどのように解体・確立したのであろうか。

ヒントになるのは『人間・この劇的なもの』である。既に引用したが、再度引用する。

生の終わりに死を位置づけえぬいかなる思想も、人間に幸福をもたらしえぬであろう。死において生の完結を考へぬ思想は、所詮、浅はかな個人主義に終わるのだ。

(『全集3』『人間・この劇的なもの』p.592)

「死」を意識することの重要性を説いている。これには、果たしてどのような意義があるのであ

ろうか。

人は「死」に対する不安があるのが普通である。かといって避けることもできない。そのため、人は「死」を忘れる、あるいは避け、日常の中に没頭している。この状態をハイデガーは「頹落」^{vii}と言っている。そのハイデガーが著書『存在と時間』の中で次のように述べている。

死を『真と思ふ事』一死はその都度只自己の死であること一は世界内部的に出會ふ存在者若くは形式的な諸対象に關する凡ゆる確實性と別種のもを示しより根源的である。何故ならそれは『世にあること』に於て確かであるからである。かゝるもの故にこの真と思ふことは生存の一つの限定された態度を要求するのみならず、その覺存の全き本來性に於てのそれを要求する。先驅に於て初めて生存はその追ひ越し難い全體性に於てのその最も個有の存在を確かめる事が出来る。

『存在と時間』下巻 p.52

要約すると、「死」は人生における根源的なもので、「死」を真剣に認識することで本来の人生のあり方を捉えることができる、ということだ。福田の捉えかたもハイデガーと同じである。

ハイデガーは、「死」を認識することにより、要約次のように言っている。「自分が不完全な存在であることを認識できる。」「世俗的な欲望や自己中心的な態度から開放される。」

福田は、まさに同じような考えで実践したのである。自分が何を為すべきか謙虚に捉え、自我の構造変化を起こす位真剣に向き合い実践して行ったのが、何度も述べた「演戲」なのである。

既に福田の人柄のところでも述べたことであるが、ここでもう一度、本質的観点から再度強調しておかなければならない。

井尻氏が病状の重い福田を見舞った時のエピソードを述べた。井尻氏は「死」までも距離感を持って見ている福田に驚いたが、実は自我との闘い、人間の本来の生き方との格闘だったのである。

「演戲」によって古い「自我」を解体し、新たに

創造した福田の「自我」は、一体どのような構造であろうか。

7. 4 福田の自我の構造

今まで見てきた西洋と日本の自我の差を、一口に表現すると、西洋人に神の領域があり、日本人には他人の領域があると言える。

西洋人は2つの自我を巧に使い分け、日本人は、二項方式、「場」の中に埋もれる。福田は「全体」を設定し自我の変革を「演戲」により目指し、恐らく成功した。

「全体」を設定し、自らの宿命などを考え「全体」の中での自らの役割を設定認識した。と言うより、その役割を担う自我の領域確保に成功した。更に言い換えれば、日本的自我である他人の領域の追放、あるいは性格変えに成功した。

仏教などにおいて、悟りや無の境地があるように、他人に影響を受けない「自我」の創りに成功したのであり個人主義の確立である。

しかし、福田と雖も「自我」の主体はエゴの存在する集団的自我である。“上に脱け出る意識”、“全体と部分を意識する二重性”、“自己を隠し預ける場所”などと言っているのは、2つの「自我」が戦っているのであり、「全体」に繋がる「自我」の負けないため、あるいは統一体保持の方策なのである。

ここに、福田における「精神の政治学」がある。「全体」と繋がる純粋な自我と社会と関連する集団的自我との駆け引きである。「人格の完成体」とも言っているが、社会における色々な立場を巧に使い分けるのも「精神の政治学」であり、日本人の自我の弱点である「場」に囚われない人格の確保である。

真の客観性を得る秘密に自我の構造があることを事前に述べた。それは、2つの「自我」の確立により、集団的自我が「自我」の全体を支配し、主観に陥ることから免れ得たのである。

おわりに

残念ながら我が国においては少数の貴重な意見が取り上げられることは少ない。福田は、自らの信じ

る所に従い多くの批評・行動を行って来たが、「言論はむなし。」と嘆かざるを得なかった。

孤高の人となっても信念を曲げることはなく、何者かを信じ「絶対」の意志に沿ったと言える。

第1期に書かれた『芥川龍之介Ⅱ』の中で、こう述べている。

芥川龍之介はたしかになにもものかを信じてみたのです。(中略)自分を死にまで追ひつめた人間があるといふことは、われわれのなかにも絶対の観念が生まれつつあるといふことであるか
(中略)芥川龍之介のたたかひを出発点とし、これを克服しなければならないのです。

(「全集1」『芥川龍之介Ⅱ』p.200)

西洋との差を「絶対」に見ていたが、果たして「絶対」を見出したのか解からない。ただ、自分を超えるものを信じているとだけ言っていた。^{viii}

そして、福田は芥川の果たせなかった「自我」と徹底的に対決し、2つの「自我」の確立に成功した。難問であるだけに主題の一貫性保持・追究は驚嘆に値する。

追究し実践していったその手法は、現象に惑わされることなく問題の根源を徹底的に解明する態度、本質を見極めようとする批判精神である。

前出の森は、「懷疑主義ではなく、不可知論的要素を探求していく。そういう精神によって強靱な批判精神が育つ。」と、述べている。^{ix}

福田は一時、懷疑論者だと批判されたが、逆説的に見れば、如何に日本に真の批判精神が希薄であるかが分かる。

福田が困難な「自我」の確立をなしえた背景に「感覚」があることを指摘しなければならない。「思想というものが、普遍性を求めるいちばんもとの基盤がそこに隠れている。」^xと、同じく森が、「感覚」が経験と思想の基礎であると、述べている。

演劇について、“好きだから”、と言っているのも演劇の本質に直接触れているからであり、自我の創造を促した、「全体」も“信じている。”と、感覚である。

福田が、ゴルバチョフ擁護の発言をした時も、“私

は彼が好きなのである。”笑ってはいけない、先ず彼の人相がよい。“というのも全くそうである。井尻氏が詳しく語っている。^{xi}

「言葉」に関しても一言触れる必要がある。本当に福田にとって言葉が生きていくうえで必要なもの、日本にとって大事なものとして認識している。それが金田一博士と論争した時、言葉を単なる伝達の道具と捉える博士と文化として重要と捉える福田の差である。

言葉を本当に自分の言葉として使うと言うことが本当に生きていくと言うことで、自分自身の一部と感じ、ものを大切に作る心、「職人氣質」である。

福田は、日本人として日本自体を大切に作る心を持っており、その1つが言葉であった。福田の生涯を通じた活動全てそうなのである。

小林秀雄の福田評は、「良心を持った鳥のような感じ。」と、どこかで見たことがある。まさに、福田の本質を見抜いていると思われる。

ハイデガーの『存在と時間』から「死」に関する引用をしたが、その続きにおいて、認識する契機として「良心」の声をあげているのは注目してよい。福田の真髓は思想ではなく、人柄のところで触れた人間性である。「感覚」にしろ「職人氣質」「良心」など真摯で豊かな人間性がなければ、高邁な思想は生まれなかったのである。

ⁱ 『演劇的文化論』 p.405

ⁱⁱ 同上 p.409

ⁱⁱⁱ 評論『シェイクスピア劇のせりふ』において、ことばと行動の因果関係を詳しく述べている。特に膠着語である日本語の特性を踏まえ、断定することにより行動が容易となり、責任も生じ解かりやすくもなる。リズム感も生じる。技術的にはフレーズ、句の粒立てを強調している。

^{iv} せりふを節毎に言い切る形にして、歯切れ良く、リズム感などを出す。膠着語の弱点の打破となる。

^v 『藝術とはなにか』で指摘している。

^{vi} 最初は「二項方式」と呼び、後には、「私的三項方式」、「二項結合方式」、「二項関係」などと表現した。

^{vii} 『存在と時間』の中での指摘。日常性の中に没頭

してしまい、本来の自分のあり方を見失っている状態を指す。

viii 『評論集2』後書 p.320

ix 『生きることと考えること』 p.103

x 同上 p.54

xi 『劇的な精神 福田恆存』 p.251 から詳しく紹介している。

参考文献

- 1 『日本人と近代科学』 渡辺正雄 岩波新書 1976.1.20
- 2 『中国の近代と日本の近代』 竹内好評論集 第3巻 筑摩書房 1966.4.28
- 3 『日本人の中国観』 竹内好評論集 第3巻 筑摩書房 1966.4.28
- 4 『文明論之概略』 福沢諭吉 岩波文庫 2005.11.5
- 5 現代日本思想史講座 VII 『近代化と伝統』 筑摩書房 1959.11.20
- 6 『福田恆存と戦後の時代』 土屋道雄 日本教文社 1989.8.25
- 7 『省けん禄』 佐久間象山 岩波書店 1982.4.20
- 8 『パンセ』 前田陽一・由木康訳 中公文庫 1991.6.30
- 9 『日本の近代化と社会変動』 富永健一 講談社 2004.4.20
- 10 『日本における近代化の問題』 マリウス B・ジャンセン編 岩波書店 2002.12.6
- 11 『ヘーゲル』 城塚登訳 講談社 2002.1.20
- 12 現代日本思想大系 3 2 『新帰朝者日記』 福田恆存編 筑摩書房 1965.2.15
- 13 現代日本思想大系 3 2 『陰翳礼讃』 福田恆存編 筑摩書房 1965.2.15
- 14 『漱石文明論集』 三好行雄編 岩波文庫 2003.4.4
- 15 朝日新聞 1968.2.25
- 16 『父 福田恆存について』 福田逸 諸君 2003.4
- 17 『清潔で公平な人だった』 松原正 産経新聞 1994.11.21

18 『福田恆存の死を悼む』 白井善隆 月曜評論 1995年1月号

19 「森有正全集 1 2」 森有正 筑摩書房 1983.2.10

20 『生きることと考えること』 森有正 講談社 2009.10.9

21 『存在と時間』 下巻、寺島實仁訳 三笠書房 1940.10.31

22 『劇的な精神 福田恆存』 井尻千男 日本教文社 1994.6.6

(Received:September 30,2011)

(Issued in internet Edition:November 1,2011)